

文法学習に関わる要因の教科横断的検討

—文法課題遂行と有用感・好意度・学習方略間の関連—

教職開発コース	秋 田 喜代美
教育内容開発コース	斎 藤 兆 史
教職開発コース	藤 江 康 彦
埼玉医科大学	藤 森 千 尋
総合文化研究科	柁 木 貴 之
教職開発コース	王 林 鋒
いわき市立内郷第二中学校	三 瓶 ゆ き

A Cross-Curricular Examination of the Factors Related to Grammar Learning

—the Relationships among Meta-grammatical Ability, Feelings of Usefulness, Attitudes, and Learning Strategies—

Kiyomi AKITA, Yoshifumi SAITO, Yasuhiko FUJIE, Chihiro FUJIMORI, Takayuki MASAKI, Linfeng WANG and Yuki SAMPEI

The aim of this paper is to investigate how secondary-school students' grammar learning in Japanese and English classrooms takes place with relation to their feelings about and attitudes towards grammar learning as well as to their learning strategies and how each of them is related to grammatical ability across individual languages such as Japanese and English. This research set out by hypothesizing that secondary-school language students can learn Japanese and English more effectively by acquiring 'meta-grammatical ability' than by learning grammatical rules of Japanese and English separately in mono-lingual classrooms. We examined the relationships among their feelings concerning the usefulness of grammar, attitudes towards grammar learning, learning strategies, and the scores of a test on meta-grammatical ability by employing a questionnaire and a test on meta-grammatical ability. As a result, by means of structural equation modeling, we demonstrated the relationships among students' feelings, attitudes, learning strategies concerning grammar, and the meta-grammatical scores with a figure, and showed effective learning strategies on meta-grammatical ability.

目 次

- 1 問題と目的
 - 2 研究方法
 - A 調査対象
 - B 質問紙調査及びメタ文法課題テスト
 - 3 結果
 - A 学習過程を構成する各要因の下位尺度
 - B 文法学習モデルの構築
 - C 好意度と学習方略, 及びメタ文法得点との関連
 - 4 総合考察
-
- 1 問題と目的

新学習指導要領の改訂（中学校は平成24年度、高校は平成25年度から全面実施）においては、言語力の

育成が重要な柱の一つになっており、すべての教科を通して言語力を育成することが目指されている。この点で、言語教育を担う国語科と外国語科（主には英語科）の役割は大きいと考えられる。個別言語に着目すると、国語科と英語科では、言語教育のあり方に対する差異が強調される傾向にある。そのため、言語教育に関する共通の目的や課題に焦点をあてた教科横断的取り組みは少なく、この点で十分に検討や検証がなされていない。国語科と英語科がこれまで各教科固有に取り組んできた課題に加え、言語力の育成という観点から共通した課題を教科横断的に追究するために連携することでメタ言語能力を育成する言語教育を展開することが可能になると考えられる。

メタ言語能力とは「脳に内在している文法という知識をいわば客体化して利用することができる」能力

(大津, 1989, p.27) であり, また, 「言語のモニタリング (監視) とその結果としての言語の認知過程の調整や調和的遂行を実行する機能」(松崎, 1999, p.27) である。メタ言語能力は, 国語教育の観点からは, 構文論的・語彙論的曖昧性を見抜き, 言葉あそびを正しく分かり, 語や文を分析して, 意味論的, 文法論的に正しい語順を判定し, 矛盾やコミュニケーション上の失敗を見抜くなど, 言語についての自覚的な運用を可能にする能力として注目されている (松崎, 1999)。一方, 英語教育の観点からは, 母語以外の言語体系に関する知識を持つことで言語を比較対照することが可能となるため, メタ言語能力の発達の促進は, 外国語教育が担う目的の一つであるとして注目されている (大津, 1989; 生越, 2006)。メタ言語能力の中でも特に統語法に関わる部分に対して働く能力, つまり文法能力に特化した概念として, 「メタ文法能力」(斎藤他, 2013, 印刷中) という言葉を本稿では用いることにする。

本論文は, 言語力の中でも, 言語の普遍的な仕組みとしての文法学習に焦点を当て, 諸要因間の関連性を検討する。生徒が文法学習をどのような特徴を持つ学習と認識し, いかなる方略で学習に取り組んでいるかという認識と学習方略の関連に焦点をあて, 両教科に関する生徒への調査を通して検討をすることを目的とする。

中等教育段階では, 文法が苦手, 嫌いという生徒は多い。例えば, 田村 (2009) は 5 年間, 毎年行った高校の新入生約 200 名を対象に英語共通テストを実施した結果, 基礎的な英文法を身につけている生徒が 5 年間で 6 割減少し, 全学年の 1 割程度しか基礎文法を学びきれていないとの報告を行っている。またあわせて質問紙調査を実施し, 9 割の生徒が英語を苦手とし, その理由として英単語や文法を覚えられないとの回答を挙げている。また, 英語が得意と回答した生徒に共通しているのが, 何度も繰り返し書いて覚えたとの回答であったとしている。英文法学習は, 繰り返し書いて覚える, いわゆる暗記学習と捉えられていることが示唆される。

英語教育の文法指導では, フォーカス・オン・フォーム (Long & Robinson, 1998) という指導法が提案されている。フォーカス・オン・フォームとは, 意味伝達を中心とした言語活動を通して, 必要に応じて文法などの言語形式に注意を向けることが言語習得に有効であるとする指導法である。伊藤・大和 (2005) は, フォーカス・オン・フォームの有効性を授業実践

で検証することを目的とし, 高校 1 年生を対象に, 明示的文法指導を行ったクラス (統制群) と内容理解を中心とし目標文法項目に注意を向ける指導を行ったクラス (実験群) 間を比較し, 生徒の言語知識の習得と意識を検討している。その結果, 文法学習の正確さに関して, 実験群と統制群間に得点差はみられなかった。文法学習への意識においては, 「文法の学習は内容理解のための補助的手段である」という回答が実験群の方が統制群に比べ多かったが, 実験群でも明示的な文法説明指導を望む生徒もいたことを指摘している。期待した結果が出なかった理由として, 2 週間という実践期間の短かさを挙げている。本結果は, 教師が効果的と判断し取り組んだ指導法が生徒の文法学習に必ずしも有効であるとは限らないこと, また生徒により望む指導法に相違があることを示唆する研究である。これまで文法学習の指導法は実践的には提案されているが, その有効性は必ずしも明確に実証されており, 文法学習が好きな生徒と嫌いな生徒, 得意な生徒と苦手な生徒間での, 文法学習に対する心的態度と文法学習の方法の間の相違もこれまで明らかにされてきていない。

生徒の学習方略に関しては, 学習方略が学業成果に与える効果やその影響過程が検討されてきている (小山, 2009; 金子・大芦, 2010; 久保, 1999; 佐藤, 2004; 前田, 2002)。佐藤 (2004) は達成目標の認識が調整方略に影響を与え, 調整方略を媒介し処理方略, 学業成績に影響を与えることを示している。また, 金子・大芦 (2010) は, 自己効力感の向上が学習方略の使用を促し, 方略使用が学業成績向上に繋がることを示している。生徒の学習方略使用には, 自己効力感 (伊藤・神藤, 2003; 森, 2004) や達成目標, 学習観が関係している (中山, 2005) ことが明らかにされてきている。学習方略研究では, 特定教科ではなく学習全般を検討した研究 (伊藤・神藤, 2003; 佐藤, 2004), 英語学習の研究 (小山, 2009; 久保, 1999; 中山, 2005; 前田, 2002) 等はあるが, 文法学習の学習方略に関する研究はない。

そこで本研究では, 教科横断的な言語力の育成という問題意識からメタ文法能力の育成の基礎データとして生徒の文法学習に関する実態を明らかにすることを狙いとし, 国語科と英語科の教科の枠を越えて, 生徒の文法学習に対する心的態度と学習の取組みとの関連について, 次の 2 点を明らかにする。

- (1) 文法好意度及び文法有用感や文法学習方略使用度とメタ文法課題遂行得点 (メタ文法得点) との

関連性。

- (2) 文法好意度やメタ文法課題遂行得点に影響を与える具体的な文法学習方略。

2 研究方法

A 調査対象

調査研究協力者²⁾は、首都圏にある中高一貫校の中学1年から高校2年までの生徒（1学年3クラスで5学年）である。2012年3月に、クラスごとに国語科あるいは英語科の担当教師を通して質問紙調査と課題テストが行われた。欠席者を除き、最終的に得られたデータ総数は565名分（男子281名、女子284名）である。学年の内訳としては、中学1年118名、2年114名、3年114名、4年109名、5年110名であった。

B 質問紙調査及びメタ文法課題テスト

文法学習に関する質問紙は、北條（2000）を参考に作成した。A：文法好意度に関する質問（国語と英語、各1）、B：文法の有用性に関する質問（国語と英語、各11項目）、C：授業中に使用している文法学習方略に関する質問（国語と英語、各8項目）に対して、5. 当てはまる、4. まあ当てはまる、3. どちらともいえない、2. あまり当てはまらない、1. 当てはまらない、の一つに○をつける5件法で尋ねた。ある質問項目に対し、基本的に国語と英語それぞれについて答えることになっている。どちらかの教科に特徴的な質問については、類似した質問内容を用意し、国語と英語の質問項目が等質になるようにした（資料1）。

メタ文法能力を捉える課題テストは、国語科と英語科で共通して具体的に捉えられる文法項目として、品詞の概念、修飾関係や係り受けに焦点を当てた³⁾。メタ文法問題は日本文と英文の混合問題で、大問が2問である。1問は例題における下線部分と同じ働きをし

Table 1 「文法学習方略使用度」に関する因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

項目 番号	項目内容	因子負荷量			
		I	II	III	IV
〈文法構造注目〉					
8国	文章を読むとき、文章中に重要だと思う文法が出てきたら意識して読んだり書きだしたりする。	.844	.057	-.148	-.057
9国	文章を読むとき、読み終わってから重要だと思った文法を振り返る。	.776	.031	-.083	-.008
8英	文章を読むとき、文章中に重要だと思う文法が出てきたら意識して読んだり書きだしたりする。	.773	-.208	.092	.081
9英	文章を読むとき、読み終わってから重要だと思った文法を振り返る。	.673	.205	-.076	-.079
7国	文章を読むとき、はじめに文法に注目する。	.634	-.103	.089	.175
(2国)	（読んだことのない文章を初めて読むときには、どういう文法の規則に基づいているかを予想して考える。）→III	.475	-.012	.182	.065
7英	文章を読むとき、はじめに文法に注目する。	.427	.219	.214	-.094
〈文法関連づけ〉					
5英	英語の授業で文法を学ぶときには、国語の文法と結びつけて考えるようにしている。	-.135	.810	.056	.005
3国	国語の授業で文法を学ぶときには、英語の文法と結びつけて考えるようにしている。	.099	.704	-.057	.029
6英	英語の授業で文法を学ぶときには、日本語の文法との違いを意識するようにしている。	-.078	.565	.142	.094
4国	国語の授業で国文法の基礎を学ぶときには古文や漢文の文法と結びつけて考えるようにしている。	.238	.478	-.053	.017
〈予想〉					
1英	読んだことのない文章を初めて読むときには、用いられている単語や前後の流れから予想して考える。	-.148	.008	.858	-.058
2英	読んだことのない文章を初めて読むときには、どういう文法の規則に基づいているかを予想して考える。	.248	.004	.571	-.008
1国	読んだことのない文章を初めて読むときには、用いられている単語や前後の流れから予想して考える。	.033	.116	.401	.020
〈理由説明〉					
10英	文法の問題を解くときには、答えだけではなく、なぜそうなるのか、理由も一緒に考える。	-.035	-.001	.031	.982
10国	文法の問題を解くときには、答えだけではなく、なぜそうなるのか、理由も一緒に考える。	.089	.118	-.113	.615
因子間相関		I	II	III	IV
I		—	.536	.458	.533
II			—	.345	.245
III				—	.464
IV					—

ている項目（語句レベルと節レベル）をすべて選択する問題で、正解を答えた数を得点とし、合計7点である。他1問は文における下線部分の働き（例えば「新宿に行ったとき、人が多くてびっくりした。」「I don't know when he will come.」）についての選択肢問題で、計8点である。すなわちメタ文法問題合計15点である。英文は中学1年生が知っているレベルの英単語が用いられており、さらに日本語がヒントとして与えられた（斎藤他、2014印刷中を参照）。

3 結果

A 学習過程を構成する各要因の下位尺度

質問紙調査では、授業中に用いている文法学習方略についての質問項目と文法の有用性に関する質問項目を基に、「文法学習方略使用度」と「文法有用感」の下位尺度を構成するために、探索的因子分析を行った。「文法学習方略使用度」に関する質問16項目（国語と英語、各8項目）について、主因子法・プロマックス回転を用いて、固有値1以上を基準とし、いずれかの因子に.35以上の因子負荷量を示し、また複数の因子にまたがって.35以上の因子負荷量を示さないことを基準として単純化構造が得られるよう解析した結果、4因子を抽出した（Table 1）。累積寄与率は52.3%であった。同一の項目内容の国語と英語はほぼ同じ因子に分類された。項目2「読んだことのない文章を初めて読むときには、どういう文法の規則に基づいているかを予想して考える」のみは国語では第1因子、英語では第Ⅲ因子に分かれた。そこで因子解釈上、国語項目2のみは第Ⅲ因子に入れて、因子名をつけ尺度を構成した。尺度内信頼性はクロンバック（Cronbach） α 係数を算出した。

第1因子（項目7国英・項目8国英・項目9国英）は、文章読解の際や読み終わり、また読みはじめに重要な文法に注意を向けているところから、読解時の〈文法構造注目〉学習方略（ $\alpha = .861$ ）、第Ⅱ因子（項目3国・項目4国・項目5英・項目6英）は、言語（言葉）の枠を越えて文法を結びつけて考えているところから、言語横断的〈文法関連づけ〉学習方略（ $\alpha = .767$ ）、第Ⅲ因子（項目1国英・項目2国英）は、文章読解の際、単語や文法を予想して読むところから、読解時〈予想〉学習方略（ $\alpha = .705$ ）、第Ⅳ因子（項目10国英）は、問題解法の際にそのような答えになる理由を考えるとところから、解法時〈理由説明〉学習方略（ $\alpha = .778$ ）と命名した。 α 係数より各尺度信頼性

はあると判断した。

「文法有用感」に関する質問22項目（国語と英語、各11項目）も、「文法学習方略使用」と同様の基準で探索的因子分析を行った。その結果、基準を満たしたのは、因子負荷量の小さい一つの項目（項目10国）を除いて得られた3因子解であった。「文法学習方略使用度」とは異なり、項目内容ではなく国語（第Ⅰ因子）と英語（第Ⅱ因子）で完全に分かれ、第Ⅲ因子のみ、国語と英語の同一項目「辞書を引くのに役立つ」という実質的に一つの項目内容から成る因子が抽出された。項目10の国語「古文や漢文を学習するのに役立つ」、項目11の国語「言葉の移り変わりがわかる」、項目12の英語「他の外国語を学習するのに役立つ」は本研究の問題意識から3項目をまとめて〈言語横断的有用感〉とし、辞書に関する有用性に言及した項目4を除いた他の国語に関する項目をまとめて〈国語4技能有用感〉、英語に関する項目をまとめて〈英語4技能有用感〉として下位尺度を構成した。 α 係数は〈国語4技能有用感〉（項目1・2・3・5・6・7・8・9国）は.900、〈英語4技能有用感〉（項目1・2・3・5・6・7・8・9・13英）は.891、〈言語横断的有用感〉（項目10国・11国・12英）は.647であった。〈言語横断的有用感〉は他の尺度に比べて α 係数が低いが本研究で採用するには問題ないと判断した。「文法学習方略使用度」と「文法有用感」の平均点を尺度得点として分析に使用した。

B 文法学習モデルの構築

「文法好意度」と「文法有用感」及び「文法学習方略使用度」、「メタ文法得点」間の関係を検討するため共分散構造分析を用いて、文法学習に関する生徒の意識状況をモデル化した。分析に用いる各観測変数としての尺度得点やメタ文法得点の平均点及び標準偏差（SD）はTable 2に示すとおりである。

「国語文法好意度」と「英文法好意度」の平均得点には中程度の有意な相関が見られたため（ $r = .41, p < .01$ ）、まとめて「文法好意度」として分析に使用した。また、課題テストによるメタ文法得点は中学1年から高校2年までの5学年で学年による有意差が見られなかったことから、5学年をまとめることに問題はないと考えた。授業中の「文法学習方略使用度」が高い方が、「メタ文法得点」に結びついていると予想してパスを想定し、また「文法学習方略使用度」に影響を与える要因として、「文法有用感」と「文法好意度」からのパスを想定した。Amos 7.0を使用し、モデル適合

Table 2 各構成尺度の平均及び標準偏差 (SD)

	文法学習好意度 (5段階尺度)		文法学習方略使用度 (5段階尺度)				文法有用感 (5段階尺度)			メタ文法得点 (15点満点)
	国語	英語	構着着目	関連づけ	予想	理由説明	国4技能	英4技能	言語横断的	
平均	3.03	3.19	2.76	2.42	3.38	3.25	3.95	4.06	3.66	7.90
SD	(1.17)	(1.22)	(0.92)	(0.94)	(0.81)	(1.08)	(0.75)	(0.67)	(0.82)	(3.02)

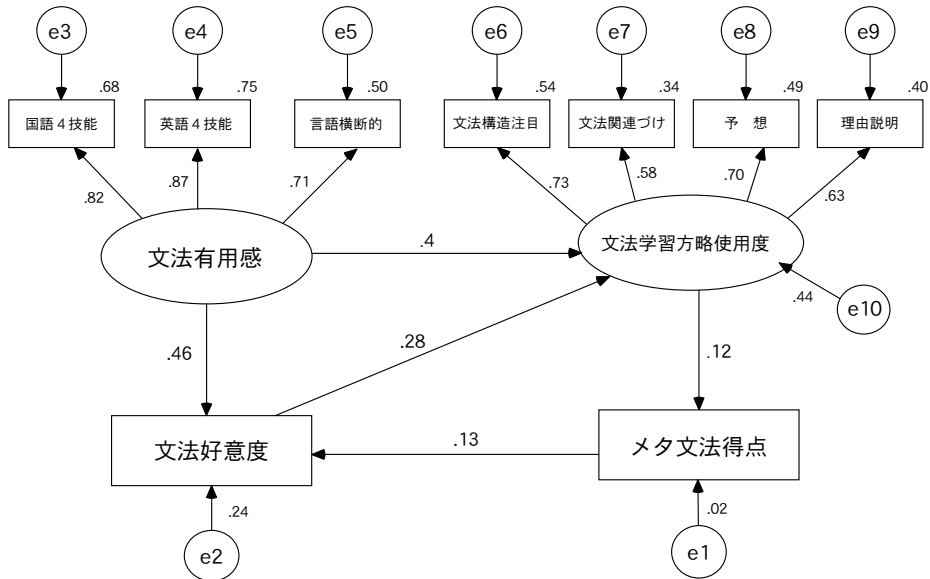


Figure 1 文法学習モデル

注) 楕円形は潜在変数、四角形は観測変数を表す。また、観測変数の右肩もしくは右下の値は重相関係数、パスに隣接した値は標準偏回帰係数を示す。「学習方略使用度」から「メタ文法得点」へのパスは5%水準で、それ以外のパスは1%水準で有意。

度指標を基に、複数のモデルを比較した結果、想定したパスが有意で、モデル適合度指標の望ましいモデルを採用した (Figure 1)。適合度指標の値はGFI=.973, AGFI=.950, CFI=.973, RMSEA=.057であり、本データはよく適合していると判断した⁴⁾。

本文法学習モデルは非逐次モデルである。文法有用感の高い生徒は授業中に文法学習方略をより多く使用し、それが文法得点に結びつく可能性を示している。また、文法有用感が高い生徒は文法学習を好きだと感じ、文法学習が好きな生徒は授業中に文法学習方略をより多く使用する可能性を示唆している。本データでは「文法学習方略使用度」から「メタ文法得点」へのパス係数、また「メタ文法得点」から「文法好意度」へのパス係数の値は小さい。その理由としては、今回使用したメタ文法課題テストが品詞や係り受けといった特定の文法項目に限られているという、課題テスト構成上の問題が挙げられる。

Table 3 学習方略使用度からメタ文法得点への重回帰分析結果

項目内容	メタ文法得点 $R^2 = .052$	
	標準偏回帰係数(β)	相関係数(r)
文法構造注目	-.139*	n.s.
文法関連づけ	n.s.	n.s.
予想	.147**	.150
理由説明	.193**	.178

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

C 好意度と学習方略、及びメタ文法得点との関連

まず、文法学習方略の中で、メタ文法得点に影響を与える方略を調べるために「文法学習方略使用度」を独立変数、メタ文法得点を従属変数として重回帰分析を行った。その結果、標準偏回帰係数及び相関係数がともに有意となった下位尺度はTable 3に示すとおりである。

本結果から、文法問題に取り組む際に、なぜそのよ

うな答えになるかを考えるという〈理由説明〉学習方略と、文章を読むとき語句や文法を予想するという〈予想〉学習方略が、メタ文法得点に正の影響を及ぼすと考えられる。一方、文章を読んでいるときや読んだ後、文法を覚えるための構造に注目するという〈文法構造注目〉と、言語間の文法を結びつけて考えるという〈文法関連づけ〉学習方略は、メタ文法得点との関係は有意ではなかった。

次に「文法好意度」から「文法学習方略使用度」の影響を調べた重回帰分析の結果が Table 4 に示すとおりである。

「文法学習方略使用度」の各尺度間には相関関係があるため、文法学習が好きな生徒が用いている学習方略を明確に特定した解釈ができない。そこで解釈は相関係数に基づいて行った。「文法学習方略使用度」の 4 尺度すべてが各教科の文法好意度と弱から中程度の相関が見られた。国語文法よりも英文法の好意度の方が、授業中に使用している学習方略使用度との相関は高い。学習方略の中では、〈予想〉学習方略が国語と英語ともに 4 つの方略の中で好意度との相関が高い(国語 $r = .279$, 英語 $r = .414$)、また〈理由説明〉も関連が見られる(国語 $r = .257$, 英語 $r = .355$)。ここからは、文法学習方略に関しては「文章中の重要な文法を意識して読んだり書き出したりする」、「読み終わってから重要な文法を振り返る」という単純な確認作業と結びつく可能性のある学習方略よりも、「文章を読むときに単語や文法を予想」したり、「なぜそのような答えになるか理由を考える」という、より深い思考処理や理解重視の学習方略使用が、文法好意度と関連しているとの結果が示される。これは文法においても意味理解のための深い処理方略の有効性を示すものである。

4 総合考察

本研究は言語力の育成という観点から、国語科と英語科の文法学習の実態を教科横断的に検討し、次の

2 点を検討した。(1)文法好意度及び文法有用感や文法学習方略使用度とメタ文法課題遂行得点(メタ文法得点)との関連性、(2)文法好意度やメタ文法課題遂行得点に影響を与える具体的な文法学習方略。

ここでは文法指導実践への示唆を得るため、(1)と(2)に関する分析結果をまとめながら、先行研究の結果と比較して考察し、最後に今後の課題について述べる。まず(1)に関して、本研究では「文法有用感」、「文法好意度」、「文法学習方略使用度」、「メタ文法得点」の影響関係を示す「文法学習モデル」を分析検討した。本モデルにより「文法有用感」が「文法学習方略使用度」に影響を与え、「文法学習方略使用度」が、「メタ文法得点」という課題遂行成果に影響を与えることを示した。また、「文法有用感」は「文法好意度」に影響を与え、「文法好意度」は「文法学習方略使用度」に影響を与えている。さらに、「メタ文法得点」は「文法好意度」に影響を与えており、それが「文法学習方略使用度」に影響を与えるという学習の循環が示された。学習は本来、相互に関連し合う循環サイクルを形成する各要因によって構成されていると考えられ、本研究モデルは「文法有用感」を起点としている。学習モデルで何を起点とするかは、研究によって異なっている。久保(1999)や前田(2002)は学習動機、佐藤(2004)は達成目標、中山(2005)は目標志向性を起点としており、これらはすべて、生徒の学習方略に影響を与える要因となっていることを表している。文法学習に特化した本研究では、「文法有用感」が文法学習方略の使用に影響を与えることが示された。

第 2 に、「文法好意度」が「文法学習方略使用度」に影響を与えることも示された。「文法が好きか嫌いか」という主観的で変化しやすい心的態度には、複雑で多様な要因が絡んでいると考えられる。その中で、「文法有用感」の「文法好意度」への正の影響から、文法学習が好きになるためには文法の有用性を実感する授業実践が行われる必要があるとの教授的示唆が得られる。「文法有用感」は〈国語 4 技能有用感〉、〈英語 4 技能有用感〉、〈言語横断的有用感〉の 3 下位尺度

Table 4 文法好意度から学習方略使用度への重回帰分析結果

項目内容	文法構造注目		文法関連づけ		予想		理由説明	
	$R^2 = .111$		$R^2 = .084$		$R^2 = .186$		$R^2 = .371$	
	(β)	(r)	(β)	(r)	(β)	(r)	(β)	(r)
国語文法好き	<i>n.s.</i>	.201	.177**	.246	.132**	.279	.134**	.257
英文法好き	.292**	.325	.170**	.242	.360**	.414	.300**	.355

注) ** $p < .01$

で構成されている。したがって、文法学習にあたっては、国語と英語の各4技能だけでなく、教科横断的な文法有用性を実感する学習指導にも、今後、着目する必要性が示唆される。つまり、個別言語を越えたことばの仕組みを意識した学習を充実させることで、「文法有用感」から「文法学習方略使用度」、あるいは「文法好意度」への影響がどのように変化するかを検討が、このモデルを基に可能であろう。

第3に、本研究における「文法学習方略使用度」から「メタ文法得点」への影響の強さは大きくはなかった。この原因については、今回使用した課題テストの妥当性の問題が一つの要因として考えられる。一方、本研究に限らず他の先行研究においても、学習方略と学習成績との関連については、弱い影響関係を示す結果しか得られていない（小山，2009；佐藤，2004；中山，2005；前田，2002）。したがって、学習成果に関しては、テストの妥当性の問題とは別に、学習方略使用以外にも様々な要因の影響を受けていることが考えられよう。

次に②に関して、文法好意度やメタ文法得点に影響を与えている具体的な学習方略について考察する。本研究では、読解時の〈文法構造注目〉方略、言語の枠を越えた〈文法関連づけ〉方略、読解時の〈予想〉方略、解法時の〈理由説明〉方略の4文法学習方略尺度を用いた。その中で〈予想〉方略と〈理由説明〉方略は、「メタ文法得点」と「文法好意度」の両方と関連が見られた。学習方略と「文法好意度」との関連を考察するにあたり、好意度と類似した心的態度を表す概念として、自己効力感と英語学習方略との関連を調べた森（2004）は、大学生を対象に、推測方略、熟考方略、作業方略の3学習方略の自己効力感の高い群と低い群間での相違を調べている。その結果、自己効力感の高い群は低い群と比べ、3方略すべてをより多く使用していた。また、大学生では中学時と比べて推測方略をより使用していること、推測方略は発達にともなって増加し、熟考方略は変化せず、作業方略は減少したことを報告している。

森（2004）の自己効力感と推測方略との関連を示した結果は、本研究の「文法好意度」が〈予想〉方略と強い相関が見られた結果とも類似する結果である。また、本研究における、読解時や読解終了時に重要な文法に注目し、書き出してみるという〈文法構造注目〉方略は、森（2004）の作業方略と類似している。したがって、作業方略よりもより深い情報処理や理解と関連している〈予想〉方略や〈理由説明〉方略の方が、

浅い処理の学習方略よりも、文法好意度や自己効力感と関連する可能性が示唆される。

最後に今後の課題として次の2点が挙げられる。具体的な学習方略とメタ文法得点との関連については、学習方略とメタ文法得点との相関が低いために今回は十分な解釈はできない。ただし、「文法好意度」と関連している学習方略が「メタ文法得点」と弱い相関はみられたことから、文法好意度と関連している学習方略使用の方が、そうではない学習方略使用よりもメタ文法得点に結びつき易いのではないかとの仮説が立てられる。今後、好意度にむすびつく学習方略のさらなる検討が必要であるだろう。

また、今回使用したメタ文法課題テストは、品詞や係り受けにのみ焦点を当てたテストとその遂行に基づく結果であり、今後メタ文法能力を総合的に測定するテスト開発が必要である。また今後もメタ文法能力育成の実践を行いながら生徒の文法意識や学習方略の変容を検討することが必要であると考えられる。

注

- 1) メタ言語能力 (metalinguistic abilities) はメタ言語意識 (metalinguistic awareness) と呼ばれることもあり、言語に対する気づきを指す。生越 (2006) は Tunmer & Cole (1985) を引いて、メタ言語能力は Phonological Awareness (音韻に対する気づき)、Word Awareness (単語についての気づき)、Form Awareness (言語形式、文法への気づき)、Pragmatic Awareness (運用上の気づき) の4領域があると説明している。本稿では、このうちの文法への気づきに焦点を当てている。
- 2) この調査協力校において5年生 (高校2年生) を対象に、国語科と英語科とが連携し、メタ文法能力の育成を目指したデザイン実験授業の実践が行われた。その詳細については、秋田他 (2013)、斎藤他 (2013, 2014印刷中) に報告されている。
- 3) 注2にあるデザイン実験授業では、国語科と英語科の文法学習において、個別言語文法を越えて共通した文法概念、つまりメタ文法概念として、修飾/被修飾の関係 (品詞、係り受けを含む) に焦点が当てられた。その成果を確認するためにメタ文法課題テストについても修飾関係に焦点を当ててある。そのため、メタ文法課題テストはメタ文法能力全般を測っているというわけではない。
- 4) 「文法好意度」から「文法有用感」への正のパスの可能性も考えられた。そこで、そのパスを想定するモデルと比較したところ、「文法方略使用度」から「メタ文法得点」へのパスが有意でなくなるため、Figure 1のモデルを採用することにした。

引用文献

- Canale, M & Swain, M. (1980) Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, 1, 1-47.

- 北條礼子 (2000) 「日本人EFL学習者の英語学習方略に関する研究 (8): 中学生対象の国語学習方略の調査項目の検討」上越教育学研究紀要19(2), 777-784.
- 伊藤崇・大和隆介 (2005) 「コミュニケーション活動と文法指導が融合したメタ認知的活動を伴う授業の実践とその効果に関する研究」岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究7, 181-197.
- 伊藤崇達・神藤貴昭 (2003) 「自己効力感, 不安, 自己調整学習方略, 学習の持続性に関する因果モデルの検証: 認知的側面と動機づけの側面の自己調整学習方略に着目して」日本教育工学誌27(4), 377-385.
- 金子功一・大芦治 (2010) 「学習方略に関する研究についての近年の動向」千葉大学教育学部研究紀要58, 79-87.
- 久保信子 (1999) 「大学生の英語学習における動機づけモデルの検討—学習動機, 認知的評価, 学習行動およびパフォーマンスの関連—」教育心理学研究47, 511-520.
- 小山義徳 (2009) 「英単語学習方略が英語の文法・語法上のエラー生起に与える影響の検討」教育心理学研究57, 73-85.
- Long, M., & Robinson, P. (1998). Focus on form: Theory, research, and practice. In C. Doughty & J. Williams (Eds.), Focus on form in classroom second language acquisition (pp. 15-41). Cambridge: Cambridge University Press.
- 前田啓朗 (2002) 「高校生の英語学習方略使用と学習達成—学習動機と学習に関する認知的評価との関連—」外国語教育メディア学会 Language Education & Technology(39), 137-148.
- 松崎正治 (1999) 「〈メタ言語能力〉を育てる教材の開発」国語科教育38, 27-34.
- 森陽子 (2004) 「大学生の自己効力感と英語学習方略の関係」日本教育工学会論文誌28 (Suppl.) 45-48.
- 中山晃 (2005) 「日本人大学生の英語学習における目標志向性と学習観および学習方略の関係のモデル化とその検討」教育心理学研究53, 320-330.
- 大津由紀雄 (1989) 「メタ言語能力の発達と言語教育—言語心理学からみたことばの教育」『言語』10月号, pp.26-34.
- 斎藤兆史・濱田秀行・榎木貴之・秋田喜代美・藤江康彦・藤森千尋・三瓶ゆき・王林鋒 (2012) 「メタ文法力の育成から見る中等教育段階での文法指導の展望と課題」東京大学大学院教育学研究科紀要 第52巻, 467-478.
- 斎藤兆史・秋田喜代美・藤江康彦・藤森千尋・榎木貴之・王林鋒・三瓶ゆき (2014 印刷中) 「メタ文法カリキュラムの開発」東京大学教育学研究科紀要 第53巻.
- 佐藤純 (2004) 「学習方略に関する因果モデルの検討」日本教育工学会論文誌28 (Suppl.) 29-32.
- 田村聡子 (2009) 「英文法の基礎力低下と英語嫌いの原因を探る: 新入生アンケートと英語診断テストから分析される要因」釧路工業高等専門学校紀要 第43号, 75-79.
- 生越秀子 (2006) 「初等言語教育におけるメタ言語能力開発についての一考察—国語教育と英語教育の連携を期して—」青山国際コミュニケーション研究 第10号, 61-91.

付記

本研究は科学研究費(A)「社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーションの理論的・実践的研究」(課題番号23243080 代表小玉重男)の一部であり, 共同研究プロジェクトとして計画調査実施されたものである。本論文に関わる分析記述は, 主に藤森千尋が担当した。本論文は, 日本教育心理学会第55回 (2013年8月法政大学) で「文法学習における有用感, 好意度, 及び方略使用度と文法得点との関連性についての教科横断的検討」として発表した原稿に加筆したものである。

質問紙調査にご協力下さった東京大学附属中等教育学校の国語科と英語科の諸先生及び生徒の皆様にご心より感謝を申し上げます。また統計解析に際しては貴重なコメントを下さいました, 東京大学大学院教育学研究科博士課程小野田亮介氏に謝意を表します。

資料1 質問紙調査項目の例 (文法の有用性に対する質問項目)

項目番号	項目内容
1 国英	言葉のきまりがわかるようになる。
2 国英	正しい言葉づかいができるようになる。
3 国英	複雑な文や知らない文でも文法を手がかりに読めるようになる。
4 国英	辞書を引くのに役立つ。
5 国英	正確でわかりやすい文章を書くのに役立つ。
6 国英	文を推こうしたり修正したりするのに役立つ。
7 国英	文の組み立てがわかり, 文を理解しやすくなる。
8 国英	ものの考え方や言葉の整理の仕方がわかる。
9 国英	発表するときに, 自分の意見を正確に伝えるのに役立つ。
10 国	古文や漢文を学習するのに役立つ。
11 国	言葉の移り変わりがわかる。
12 英	他の外国語を学習するのに役立つ。
13 英	英語で会話をするとき役立つ。